賢者のお告げ

賢者のお告げ

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16772511

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ブックサンタ2022

相も変わらず、戦後ネイル村です。設定てんこ盛りで、ヒュンマなら何でも許せる人向け。
「天使のおくりもの」novel/16399242、「聖人は貧者にマントを与ふ」novel/16233299のあとのお話で、「天使におくるメッセージ」novel/16452811の前に入るお話。

年が明けたのにクリスマス表紙なのは、モチーフが「クリスマス期間の終わり」だからです（汗）。とあるイベントをアレンジして作中で使用しています。
スピリチュアル風味あり。

賢者のお告げ

　マァムは、レイラの遣いで患者に薬剤を届けると、その帰りに、村の塾に立ち寄った。
　ここネイル村では、村の中に、塾と呼ばれている子どもたちの教育機関があった。そこでは、５歳から１０歳くらいまでの子どもたちが読み書きや簡単な魔法、身のこなしなどを教わっていた。
　教える者は、村の大人たちであり、交代で子どもたちの指導に当たっていた。
　この日も、マァムが塾に立ち寄ると、その建物の前庭で、４～５人の子どもたちが走り回りながら遊んでいた。
「こーら、休み時間はそろそろ終わりよ！」
　子どもたちに向かって、若い女性が声をかけた。
　いまは、中心になって塾の運営を行っているのは、若い夫婦であり、その妻の方は、マァムの同級生であるこの女性であった。
　彼女は、マァムに気付くと、笑顔で呼びかけた。
「マァム。」
　マァムも軽く右手を上げて答えた。
「忙しそうね。」
「いつものことよ。このくらいの子たちって、大勢になると、追いかけるのが大変！」
　そう言いながら、彼女は、子どもたちを建物の中に誘導した。
「ほーら、入って、入って。お勉強の時間よ！」
　すると、子どもたちが、マァムの姿に気付き、駆け寄ってきた。
「あっ、マァム！」
「マァムだ―！」
「今日はマァムが先生？」
　子どもたちはマァムを取り囲み、口々に尋ねた。
　マァムは首を横に振った。
　マァムも、塾で読み書きや身のこなしを教えることはあったが、この日は、違った。
「ううん、違うの。今日は、私はお迎えに来ただけ。」

すると、子どもたちは、また口々にマァムに呼びかけた。
「あーおむかえかー。」
「ヒュンケル？」
「ヒュンケルだよね～。」
「今日、きてたよね。」
「なかよしだねー。」
「らぶらぶ。」
「ばか、シンコンっていうんだぜ。」
　子どもたちに囃し立てられ、マァムは恥ずかしくなった。マァムは、思わず制止した。
「もうっ！そういうこと言わない！」
　マァムに軽く怒られ、子どもたちは口を尖らせた。
「えー、いいじゃんかー。」
「ほんとだもんー。」
「ヒュンケル、おしえるのうまいよね～。」
「うんうん。」
「剣のときはきびしいよー。」
「あそんでたらすっげえおこる。」
「でもちゃんとできたらほめてくれるよ～。」
「はーい、君たち、そこまで。お勉強の時間って言ったよね？」
　マァムの窮地を友が救った。
　大魔王との戦いから数年を経た現在、ヒュンケルはここネイル村でマァムとともに暮らしていた。それは、まさに、子どもたちの言うとおりの新婚生活であったのだが、マァムとしては、改めてそのように言われると恥ずかしく思ってしまう。
　ヒュンケルは、ネイル村で生活するようになると、長老から様々な仕事や作業を請け負った。この塾での仕事もその一つであり、彼は、ときどきこの場で、読み書きや剣技を子どもたちに教えていた。
　今日も同じだった。
　ヒュンケルは、塾の中庭で、子どもたちに剣技を教えることも多かったが、この日は外には出ていなかった。ということは、建物の中で、子どもたちの読み書きを見ているのだろう。

邪魔をすると悪いなと思い、マァムは、少し友と話をした後、彼女に告げた。
「私、表で待ってるね。」
　すると、友人は、マァムに笑顔で答えた。
「きりのいいところで上がるように言っておくわ。」
「ありがとう。」
　マァムは、中庭のベンチに腰を下ろした。ヒュンケルが出てくるまでは少し時間がかかるだろうから、彼女はのんびり、彼を待つことにした。この日はまだ秋も半ばで、日向にいると温かかった。
　すると、マァムの足元に小さな影が近寄ってきた。じっと、マァムを見上げている。
　背格好からすると、３～４歳くらいだろうか。塾で学ぶには、少し早い年齢だ。
　柔らかい栗毛の髪は肩先で切りそろえられており、まっさらな綿のワンピースがよく似合っていた。
　マァムは、しゃがんで少女に声をかけた。
「こんにちは。お兄ちゃんかお姉ちゃんと来たのかな？」
　だが、少女は、ただまっすぐにマァムを見つめていた。幼い少女のその深い色の大きな瞳は、湖の底のように凪いでおり、じっと、心の底まで見通すような強さを秘めていた。
　マァムは、黒髪の友人を思い出した。
　メルルに似ている。
　顔立ちは全く異なるのに、少女のまっすぐな、この世の真理までも見通しそうなその瞳が、マァムにメルルを思い起こさせた。
　少女は、しばらくの間、まっすぐにマァムを見つめていたが、やがて、ぽつりとマァムに尋ねた。
「おねえちゃん・・・こわくないの？」
「え？」
　マァムは何のことかわからずに問い返した。
　すると、そこに別の声が降ってきた。
「マァム。」
　聞き慣れた声にマァムが顔をあげると、そこには、いつも通りの彼の姿があった。マァムは、ぱっと表情を明るくして、彼を呼ん

だ。
「ヒュンケル。」
「迎えに来てくれたのか。」
「うん。近くまで来たから、と思って。
　もう帰れるの？」
「ああ、終わったところだ。」
　マァムがしゃがんだままヒュンケルを見上げて会話を続けていた。
　すると、不意に、マァムは背中にぬくもりを感じた。軽く振り返ると、先ほどの少女が、いつの間にかマァムの背後に回っていた。少女は、姿を隠すようにマァムの背後に身を寄せ、マァムの服を小さな両手でぎゅっとつかんでいた。その手が小さく震えていた。
　マァムは戸惑って、少女に声をかけた。
「どうしたの？・・・大丈夫よ。」
　だが、少女は、ぎゅっとマァムの服をつかみ、うつむいたままだった。顔をあげようとはしなかった。

「メルルに似ていたな。」
　自宅までの帰り道、ヒュンケルがつぶやいた。先ほど、塾で見かけた幼い少女のことだとすぐにマァムも気づいた。
「あ、私も思ったわ。顔立ちは全く違うのに、なんとなく・・・雰囲気かしら。」
　すると、ヒュンケルはすぐに言葉を継いだ。
「目が似ているんだ。」
　その言葉に、マァムもうなずいた。まっすぐに、真理を見通すかのような深い瞳。それはメルルにも感じたものだった。
「うん、そうね。」
　ヒュンケルは、ぽつりとつぶやいた。
「・・・きっと、あの子には見えていたんだな。俺が何を背負っているのか。」
　その言葉に、言いようのない寂しさを感じ、マァムは、そっとヒュンケルに手を伸ばした。ヒュンケルの左手に、マァムが右手を添えた。

「大人の男の人を怖がる小さな子はよくいるわ。貴方は背が高いから。」
　マァムの気遣いを感じ、ヒュンケルは、自分の手に添えられたマァムの手を握り返した。二人の指が絡まり、互いに握り合う。
「ありがとう、マァム。」
　ヒュンケルは、マァムに礼を述べた。そして、淡々と言葉をつづけた。
「俺も、悲観しているわけでも卑屈になっているわけでもない。
　ただ、どうしようもない、変えられないこともある。それだけだ。」
　そのまま、二人は手をつないで家路をたどった。
　マァムは、しばらく無言でいたが、やがて、ヒュンケルに言葉をかけた。
「あのね、さっき、あなたを待っている間に少し話を聞いたの。
　ヒュンケル、教え方うまいって。子どもたちも喜んでいたわ。」
「そうか。それはありがたいな。」
　そう答えるヒュンケルの表情は穏やかだった。
　少しずつ、あの戦いの日々が遠くなる。
　ヒュンケルの過去は変えられない。いまなお、彼を悩ませる遠い記憶もあるのだろう。
　だが、それでも、わずかずつであっても、何もない平和な暮らしに馴染んでいってほしいと、マァムは願っていた。

　それから数か月経ち、年を越した。
　ネイル村では、年が明けて数日が経つと、もみの木のかざりを片付ける習わしがある。
　師走に村を賑やかしく彩ったもみの木の装飾や、玄関先のかざりなどは、この日に全て片付けられる。
　あるものはまた次の年までしまい込まれ、あるものは火にくべられ、天へと返される。そうして、祝祭の日々は終わりを告げ、また静かな日々が戻ってくるのだ。
　村の広場の大きなもみの木のかざりを１つずつ外しながら、村の子どもたちは笑い声を立てていた。

窓の外から流れ込む、子どもたちの歓声を聞きながら、ヒュンケルは、手元の本をめくった。
　どちらかと言えば、子供向けに描かれた、絵の多い本である。
ヒュンケルが読むのには似つかわしくはないが、彼は、その本を丁寧に読み進めていた。
　すると、隣から、マァムが声をかけた。
「聖誕祭の本、ちょっと子どもっぽすぎる？」
「いや、ちょうどいい。俺はあまり、こういった習慣に詳しくないからな。」
　そう言ってヒュンケルは笑みを浮かべた。
「先生と一緒にいたときに、こうした習慣を少しだけ教えてもらったこともあった。ただ、聞きかじりだったからな。こうしてきちんと本で読めるとありがたい。」
「村の習わしなら、いくらでも聞いて。」
「ああ、頼む。」
　ヒュンケルがネイル村で暮らすようになって初めて迎えた新年は、穏やかに過ぎようとしていた。
　地上で暮らした期間が短いヒュンケルは、学問的な知識は豊富でも、こうした世情の習わしや習俗には、実に疎かった。本人もそれをわかっていたので、村で暮らすようになると、ヒュンケルは積極的に、村の習慣や行事をマァムに尋ねていた。
　この日、ヒュンケルが読んでいた本は、子ども向けに書かれた聖誕祭についての物語りだった。
　年の瀬に、３人の賢者が星を見て、神の御子の誕生を知る。そして彼らは、神の子を探す旅に出る。世界中を旅し、そうして、彼らは、世界の中心の地で、神の御子を見つけるのだ。
　その物語が、平易な言葉で、鮮やかな絵とともに、本の中に描かれていた。
　マァムは、ヒュンケルが本を読むのを眺めながら、口を開いた。
「その３人の賢者って、ロモスの人だって言われているのよ。」
「そうなのか。」
　ヒュンケルの問いに、マァムはうなずいた。
「うん。

ロモスの三賢者が、星を見て、神の御子の誕生を知るの。そして、彼らは、ホルキア大陸、ギルドメイン大陸、マルノーラ大陸と旅をして、最後に神の御子を見つけた『世界の中心の地』というのが、テランの竜の泉のことじゃないかってね。」
「なるほどな。」
　マァムの話を聞きながらヒュンケルは、ふと、テランの静謐な森と湖の大地を思い浮かべた。
　そして、その景色の中に、末弟の姿を置き、テランの森と湖を背に立つ、おとうと弟子を思い浮かべた。
　ヒュンケルはぽつりとつぶやいた。
「もしかすると、この『神の御子』というのは、古（いにしえ）の竜（ドラゴン）の騎士だったのかもしれないな。」
「えっ？」
「・・・いや、ふと思っただけだ。俺も、ダイに導かれたようなものだからな。」
　そう言って、ヒュンケルは、懐かしそうに目を細めた。
　そうしていると、玄関のドアがノックされた。
「あ、そろそろ来たわね。小さな賢者様が。」
　マァムは、そういうと、嬉しそうに玄関に駆け寄った。ドアを開ける。
　すると、玄関ドアの前に、小さな少年少女が立っていた。みんな、司祭の装束を纏っている。
　マァムは、幼い子どもたちに声をかけた。
「いらっしゃい、小さな三賢者様。」
　すると、子どもたちは、声をそろえて、マァムに祝福の言葉を述べた。
「あなた方に健康と幸せが訪れますように。」
「ありがとうございます。」
　マァムは、慣例に従って、丁寧に礼を述べた。
　神の御子を探しに旅に出たという三人の賢者に倣って、祝祭の日の終わりには、こうして、その賢者を模した子どもたちが家々を回り、祝福の言葉を述べる。それがこの日の行事だった。
　三人の子どもたちのうち、年長の男の子二人は、マァムも村の塾

で見かけた子どもたちだった。
　ヒュンケルも、家の奥から玄関先に出てくると、少年たちは彼に目を止めた。
「あー、ヒュンケル。」
「ヒュンケルだー。」
「ヒュンケルにも健康と幸せがありますように。」
　少年たちの祝福の言葉に、ヒュンケルは、少し戸惑ったのか、照れ臭そうに微笑んだ。だが、それでもきちんと礼を述べるのが彼らしい。
「ありがとう。」
　ふとみると、３人の子どもたちの中に、幼い少女がいるのが気付いた。いつか、村の塾の前で見かけた、メルルによく似た目の少女だった。
　少女は、玄関先に出てきたヒュンケルをじっと見上げた。そして、自分から彼に歩み寄った。
　てっきり怖がられると思ったヒュンケルは、驚いた。
　少女は、ヒュンケルに近づくと、彼をじっと見上げて言葉をかけた。
「おにいちゃん・・・おとうさんになったんだね。」
「・・・え？」
　ヒュンケルは、言葉の意味が分からず、声を詰まらせた。
　しかし、少女は、彼の戸惑いにかまわず、今度はマァムに近づくと、マァムの前で、ばいばい、とばかりに手を振った。
　だが、その高さがおかしかった。マァムを見上げることなく、少女の目線のまま、手を振っている。ちょうどそれは、マァムの腹の高さだった。
　そして、少女は、そのまま、また仲間の子どもたちの元に戻った。
　子どもたちはそろって、マァムとヒュンケルに頭を下げて挨拶をした。
「じゃあねー。」
「また塾でねー。」
　そして、明るい声をあげると、次の家に行こうとした。

ヒュンケルは、戸惑った面持ちのまま、その場に立ち尽くしていた。
　マァムの脳裏にも、先ほどの少女の言葉が何度も繰り返されていた。マァムは、自分をかばうように、両手を腹部に回し、己を抱きしめた。
—・・・まさか・・・。
　マァムは、遠ざかる子どもたちを追いかけた。
「待って！」
　子どもたちが足を止め、不思議そうな顔でマァムを振り返った。
　マァムは、子どもたちに追い付くと、少し頬を赤らめ、少女に声をかけた。
「・・・あの・・・気づいたの・・・？」
　少女は、首をかしげてマァムを見つめ返した。だが、何も言葉を発さなかった。
　マァムも戸惑い、今度は別のことを少女に尋ねた。
「・・・彼のこと、怖くなかったの？」
　すると、今度は、少女はこっくりと頷いた。
「たくさん、まもってるね。あかちゃんのこと。
　おにいちゃんも。
　まもってるひとたち。たくさんいるね。」
　そうして、今度はマァムを指さした。
「おねえちゃんも、まもってるひとがいる。」
　少女は、少し離れたところで佇んだままのヒュンケルを見ると、こう答えた。
「きらきら、たくさんあるね。
　あかちゃんと、おにいちゃんのところ。」
　そうして、また、不自然な高さでマァムに向かって手を振った。
　マァムは、自然、自分の腹部に両手を添え、三人の幼い賢者を見送った。
　人々に健康と幸せを届ける彼らを。
　マァムの胸の内で、先ほどの少女の言葉が何度も繰り返された。
—まもってるひとがいる。
　その言葉が、温かく、胸の中に広がっていった。

マァムは、自然と、幾人かの姿を思い浮かべた。そして、心の中で、彼らに礼を言った。
—・・・父さん・・・バルトスさん・・・モルグさん・・・それに、彼を守ってくれた不死騎団の人たち・・・。ありがとう。
　あの少女の目に見えていたマァムを、そして、ヒュンケルを「まもっているひと」。それはきっとこの世ならざる者なのだろう。
　だが、マァムには、それは少しも恐ろしいことではなかった。
　いまはもうどこにもいない彼らが、いまもなお、自分たちを守ってくれている。それがたとえ幻であっても、それを指し示す少女の言葉が、マァムの胸に温かな火を灯した。
　マァムは、彼らを見送ると、玄関口に戻った。そこには、先ほどと同じ、幾分か戸惑った様子のヒュンケルがいた。
　彼はマァムに尋ねた。
「マァム・・・あの子はいったい・・・。」
　すると、マァムは、極上の微笑みで彼に答えた。
「かわいい賢者様が幸せを届けてくれたわ。」
　そして、彼を室内に促しながら、言葉をつづけた。
「ゆっくり話すわね。大事なことだから。」
　そう言って、マァムは玄関の扉を閉めた。

　新しい年は、始まったばかりだった。